



連載
I

当財団専門委員
私の研究と観光

第12回

観光における 地域資源管理

東京大学大学院農学生命科学研究科教授 下村彰男



下村彰男(しもむら・あきお)
東京大学大学院農学生命科学研究科教授(森林風
致計画学研究室)。1955年兵庫県生まれ。東京
大学農学部林学科、同大学院農学系研究科林学専
門課程修了。(株)ラック計画研究所、東京大学農学
部助教等を経て2001年から現職。専門は造園学、風景計画、
観光・レクリエーション計画、エコツーリズム。各地域の文化的景観
の保全管理方針などについて研究。共著に『人と森の環境学』『ラン
ドスケープのしごと』『都市美』『フォレストスケープ』など。

専門分野が何かと聞かれた時に、いかに答えるかは意外に難しいように思う。最近では、概ね「風景計画」と答えることにしているが、以前は、相手の仕事や専門分野、年齢などによつて、造園と答えたり、地域計画、観光計画、あるいは森林風致と答えるなど様々であった。このところ風景計画と答えているのは、自分が専門として検討していることを比較的広い範囲の分野において位置づけ、説明することもできるよつになつてきたからであろうと考えている。

風景を読む

―ランドスケープ・プリテラシー―

その「風景計画」であるが、一般的には、電柱や看板など煩雑な要素を取り除いたり、街並みのファサードを修景したり、あるいは地域のシンボルや眺望を演出したりするなど、「風景を美しく整える」ことが基本だと考えられている。しかしながら、風景計画つまり地域における風景づくりにとつて、表層としての風景を整えることもさることながら、「風景を読む」ことが非

常に重要であると考えている。

では、風景を読むとは、どのようなことなのか。TVの人気番組「プラタモリ」を思い浮かべると分かり易い。タモリが街を歩きながら、街の様々な様相から、地域の自然や歴史を読み取つていく。このように街の風景には様々な地域情報が刻み込まれており、これを読み解きながら、地域や街の記憶や文化的アイデンティティを確認していく作業が「風景を読む」ことだと考えている。

地域や街の風景は、地域で暮らす

人々と地域の自然環境や地域社会との相互関係が歴史的に集積し顕在化しているものである。したがつて風景を読むことを通して、地域の風景の中に刻み込まれている地域の自然環境の特質や、それに対応してきた人々の地域ならではの営みの歴史を再確認することができる。そうした作業を通して、地域ならではの生活様式や地域が歴史の中で醸成してきた生活文化など、観光や地域づくりにおける拠り所を浮き彫りにしていくことが重要であると考えている。

観光資源の変容と風景

―観光資源の記号性

そしてプラタモリが人気番組となっているように、時代の価値観が変化していく中で、この「風景を読む」ことに対する関心が高まってきていると考えられる。したがって、こうした風景を読む作業あるいは解読した地域の諸情報は、現代の観光やまちづくりにおいて、重要な「資源」となってきたと言えるのではないか。つまり風景を読む作業は、観光やまちづくりにおいて、その根幹となる資源を探したり確認したりする作業と重なっているように思う。

周遊型観光の頃の観光資源は、傑出した山や湖、あるいは寺や遊園地といった「もの」や「こと」が中心であった。しかしながら、滞在・滞留型へと推移してきた今日では、観光客が求める資源の質的変容が指摘されており、地域ならではの暮らしを体験したり地域の名物料理を楽しむなど、その地域でしか味わえない活動や体験が求められるようになっていく。

つまり現代の観光資源は、地域らしい風景、地域ならではの料理や特産物

そして地域催事としての祭りや行事など、表現形としてどこにでもある「風景」や「料理」「祭り」を見たり体験したりすることを通して、背景・基盤としての「地域らしさ」つまり地域固有の生活様式や生活文化、さらに換言すると地域の文化的アイデンティティを求めるといった二重性を有していると言えるのではないか。

これは記号論で言う、記号表現（シニフィアン）と記号内容（シニフィエ）との関係のようなものと考えられる。つまり、現代の観光資源は「記号」的性格を有しており、地域の生活様式や生活文化とそれらが生み出す暮らしや料理、祭りや行事、風景などがセットになっており、地域らしさや地域性そのものが資源となってきたと考えている。

地域資源管理という考え方 ―観光の持続性

現在の私自身の関心は、風景を読むことと、その保全管理のあり方をベースにした新たな風景計画論の検討である。もう少し具体的には、①風景の読み取り方…現在の風景から、地域個性

を導出・明確化する手法の検討、②風景の（中の地域個性の）保全管理の進め方…地域個性を人々で共有し来訪者に伝えるとともに、持続的に活用しながら洗練させていく仕組み（担い手や財源等）の検討、である。

この風景計画論には観光、つまり来訪者の関与は不可欠であり、これを観光サイドから見れば、「資源管理」という領域になると考えている。これまで観光の領域において、資源管理という考え方は希薄だったのではないか。観光資源の資源性が先天的・固定的に与えられ、周辺整備等を通して観光対象化するという概念整理の中では、資源に対する働きかけは「管理」というニュアンスにはなりにくい。

しかしながら記号的性格を有した地域資源の場合には、根底にある地域文化や生活様式をいかに明確化し観光客に上手に伝えるのか、また表層としての活動・体験の質をいかに洗練させるのかによって資源性は上下することが想定される。そして、観光をまちづくりの一環として位置づけ、観光資源の保護・保全と活用とを循環的に実現していくという考え方の下では、資源を継続的に管理していくという概念はこ

く自然に受け止められよう。

観光は文化的な行為であり、多様な側面を有している。観光を検討するうえで受け入れられる地域サイドから考えることも重要な側面である。地域にとつては、観光がまちづくりの一環として持続的かつ発展的に進展することが重要である。そのためには観光が成立するための前提である観光資源が護られ持続的に洗練され活用されていくことは重要な課題である。社会の様相や価値観が大きく変わりつつある今日、観光資源についても「地域資源として管理する」という考えの下に、その新たな仕組みを構築していく必要があると考えている。



北山杉(写真:Skylight/PIXTA)